

田村將軍

楠山正雄

青空文庫

京都きやうとに行つたことのある人は、きつとその清水きよみずの観音かんのんさま様にお参りまいをして、あの
 高い舞台ぶたいの上から目の下の京都きやうとの町まちをながめ、それからその向こうむに青々あおあおと霞かすんでい
 る御所ごしよの松林まつばやしをはるかに拝おがんだに違いちがありません。また後ろうしをふり返かえると御堂おどうの上に
 のしかかるようにそびえている東山ひがしやまのはるかのてつぺんに、真まつ黒くろに繁しげつた杉すぎの木立こだ
 ちがぬつと顔かおを出だしているのを見みたに違いちがありません。この京都きやうとの町まちを一目ひとめに見晴みはらす
 高い山たかの上のお墓はかに埋うめられている人は、坂上田村麻呂さかのうえのたむらまろという昔むかしの名高なだかい将軍しようぐん
 す。そしてそのなきがらを埋うめたお墓はかを将軍塚しようぐんづかといつて、千何年なんねんという長い間ながあいざよう京
 都との鎮守ちんじゆの神様かみさまのように崇あがめられて、何か世なにかよの中に災わざわいの起おこる時ときには、きつと将
 軍塚うぐんづかが音おとをたてて動き出うごすといい伝つたえているのでございませす。
 坂上田村麻呂さかのうえのたむらまろは今いまから千年ねんあま余あまりも昔むかし、桓武天皇かんむてんのうが京都きやうとにはじめて御所ごしよをお造つく
 りになつたころ、天子てんしさまのお供ともをして奈良ならの都みやこから京きやうの都みやこへ移うつつて来たきうちの一人ひとりでし
 た。背せいの高たかさが五尺八寸しやくすんむねに胸むねの厚あつさが一尺二寸しやくすん、巨人おおびとのような大男おおおとこでございませす。

そして熊鷹くまたかのようなこわい目をして、鉄てつの針はりを植うえたようなひげがいつぱい顔かおに生はえて
 いました。それから体からだの重おもみが六十四斤きんもあつて、怒おこつて力ちからをうんと入いれると、その四倍ばい
 も重おもくなるといわれていました。それでどんな荒あらえびすでも、虎とら狼おおかみのような猛もう獣じゆう
 でも、田村麻呂たむらまろに一目ひとめにらまれると、たちまち一ひと縮ちぢぢみに縮ちぢぢみあがるといふほどでした。
 その代かわり機嫌きげんよくにこにこしている時は、三つ四つの子供こどももなついで、ひぎに抱だかれてす
 やすやと眠ねむるといふほどの人でした。ですから部下ぶかの兵士へいしたちも田村麻呂たむらまろを慕したいきつて、
 そのためには火水ひみずの中なにもとび込こむことをいけませんでした。

田村麻呂たむらまろはそんなに強つよい人ひとでしたけれど、またたいそう心こころのやさしい人で、人並ひとなみはず
 れて信心しんじん深く、いつも清きよ水みずの観音かんのん様さまにかかさずお参まいりをして、武運ぶうんを祈いのつておりま
 した。

二

ある時とき奥州おうしゆうの荒あらえびすで高丸たかまるというものが謀反むほんを起おこしました。天子てんしさまの御ご命めい令れいを少すこしも聞きかないばかりでなく、都みやこからさし向むけてある役人やくにんを攻せめて斬きり殺ころした

り、人民の物をかすめて、まるで王様のようないきおはたいそう御心配になつて、度々兵隊をおくつて高丸をお討たせになりましたが、いつも向こうの勢いが強くつて、そのたんびに負けて逃げて帰つて来ました。そこでこの上はもう田村麻呂をやるほかはないというので、いよいよ田村麻呂を大将にして、奥州へ出陣させることになりました。

天子さまの仰せ付けを受けますと、田村麻呂はかしこまつて、さつそく兵隊を揃える手はずをしました。いよいよ出陣の支度ができ上がつて、京都を立とうとする朝、田村麻呂はいつものとおりに清水の観音様にお参りをして、

「どうぞこんどの戦に首尾よく勝つて、天子さまの御心配の解けますように。」
と熱心にお祈りをして、奥州へ向かつて立つて行きました。

奥州へ着いていよいよ高丸と戦をはじめてみますと、なるほど向こうは名高い荒えびすだけのことはあつて、一度戦をしかけたら勝つまでは決してやめません。味が残らず討たれて最後の一人になるまでも決して後へは退きません。親が討たれれば子が進み、子が討たれれば親がつづくという風に、味方の死骸を踏み越え、踏み越え、どこまでも進んで来ます。

ですから田村麻呂の軍勢も、勇氣は少しも衰えませんが、さしつめさしつめ矢を射るうちに敵の数はいよいよふえるばかりで、矢種の方がとうに尽きてきました。いくら気ばかりあせても、矢種がなくなつては戦はできません。残念ながら味方が負けいくさかと田村麻呂も歯ぎしりをしてくやしがりしました。するといつどこから出て来たか、大きなひげの生えた男と、かわいらしい小さな坊さんが出て来て、どんだん雨のように射出す敵の矢の中をくぐりくぐり、平気な顔をして敵の勢の中へ歩いて行って、身方の射出した矢をせつせと拾つては、こちらへ運び返して来ました。お陰で身方は射ても、射ても、あとからあとから矢がふえて、いつまでもつきるといふことがありません。ますますはげしく射かけましたから、さすがに乱暴な荒えびすも総崩れになって、かなしい声をあげながら逃げ出しました。味方はその図をはずさず、どこまでも追っかけて行きました。敵の大將の高丸はくやしがつて、味方をしかりつけては、どこまでも踏み止まろうとしましたけれど、一度崩れかかった勢いはどうしても立ち直りません。そのうち高丸も田村麻呂の鋭い矢先にかかつて、乱軍の中に討ち死にしまいました。田村麻呂はこの勢いに乗つて、達谷の窟という大きな岩屋の中にかくれている、高丸の仲間の悪路王という荒えびすをもついでに攻め殺してしまいました。

田村麻呂は奥州の荒えびすを平らげて、ゆるゆると京都へ凱旋いたしました。

天子さまはたいそうよろこびになつて、田村麻呂にたくさんの御褒美をお授けになりました。そして改めて征夷大將軍という役におつけになりました。みんなはそれから後田村麻呂に田村將軍という名をつけて、尊敬するようになりました。

田村麻呂は自分がこれほどの名誉を受けることになつたのも、清水の観音様にお祈りをした御利益だと思つて、都に帰るとさつそく清水にお参りをして、ねんごろにお礼を申し上げます。

さてこの時までも始終不思議でならなかつたのは、あの時の小さな坊さんと大きなひげ男でした。そこで話のついでに、田村麻呂はお寺の和尚さんに向かつて、奥州の戦ではこれこれこういうことがあつたと話しますと、和尚さんは横手を打つて、

「ははあ、それでわかりました。するとその小坊主というのは勝軍地蔵さまで、大きなひげ男と見たのは勝敵毘沙門天に違いありません。どちらもこの御堂にお鎮まり

になつていらつしやいます。」

といたしました。田村麻呂は不思議に思つて、

「ではさつそく、その地藏さまと毘沙門さまにお参りをして来よう。」

といつて、本堂に祀つてある勝軍地藏と勝敵毘沙門天のお像の前に行つてみ

ますと、どうでしょう。地藏さまと毘沙門さまのお像の、頭にも胸にも、手足にも、肩

先にも、幾箇所となく刀きずや矢きずがあつて、おまけにお足にはこてこてと泥さえ

ついておりました。

田村麻呂は今更仏さまの御利益のあらたかなのにつくづく感心して、天子さまから

頂いたお金を残らず和尚さんにあずけて、お寺をりっぱにこしらえました。今の清水

寺があれほどの大きなお寺になつたのは、田村麻呂の時から、そうなつたものだという

ことです。

田村麻呂はその後鈴鹿山の鬼を退治したり、藤原仲成というものの謀反を平らげ

たり、いろいろの手柄を立てて、日本一の將軍とあがめられました。五十四の年

に病気で亡くなりました。けれどもこれほどのえらい將軍をただ葬つてしまうのは

惜しいので、そのなきがらに鎧を着せ、兜をかぶせたまま、棺の中に立たせました。そし

てそれを都みやこの四方しほうを見晴みはらす東ひがし山やまのてっぺんに持もって行いって、
御所ごしよの方ほうに顔かおのむくよ
うに立たてて埋うずめました。これが将軍塚しょうぐんづかの起おこりでございます。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：今井忠夫

2004年1月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田村将軍

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>